

音楽配信とデジタルストリームプレーヤー

株式会社リンジャパン 古川 雅紀

○ 三年を振り返る

2010年10月をもって、LINN PRODUCTS 社が「DS（デジタルストリーム）プレーヤー」を発表してから丁度三年が経過する。現状が「石の上にも三年」との諺の通りかどうかはさておき、望むと望まざるとにかかわらず変貌する世の中で、LINN の DS を取り巻く状況も大きく変化しました。

現時点からこの三年を振り返り、高音質な音楽再生を目指し、長年取り組まれてきたコンポーネントスタイルのオーディオにとってネットワークを活用したデジタルストリームプレーヤーが備えている可能性について少し考察してみたいと思います。



KLIMAX DS (クライマックス・DS)

○ 全く新しい製品ジャンル

2007年秋の東京インターナショナルオーディオショウの小社ブースでの製品お披露目に先立ち、LINN が公式にデジタルストリームプレーヤーとして KLIMAX DS を発表した際に最も戸惑いを禁じ得なかったのは、総輸入代理店である小社かもしれません。

それは次の二つの理由によってです。ひとつには、CD を凌駕する次世代オーディオとして SACD をソフト、ハード両面からサポートしてきた LINN からメカレスのミュージックプレーヤーが発表さ

れたことへの驚き。他方、ネットワークを活用するシステムアップ、つまり、音源を保存するハードディスクである NAS（ネットワーク・アタッチド・ストレージ）、および音源やデータの取得と操作のために用いる PC 等サードパーティの製品を必要とする等、設置と販売に関する戸惑い。とりわけハイエンドオーディオの領域においてその時期 LINN には、SACD 再生可能なディスクプレーヤーの最高峰機種（つまり CD12 の後継機種）発表の期待が寄せられていたこともあり、市場はもちろんのこと、プレスやほとんどの販売店様からホットな反応は得られませんでした。

そのような発売当時の状況下においては、いまとは違って、音楽配信によるハイレゾリューション音楽データの購入や再生がもたらす新たな音質水準についてのプロモーションも、DS の認知と販売にとっての有効な手立てとはならず、専ら CD のリッピングデータの再生とディスクプレーヤーでの再生クオリティの比較によるデモンストレーションが唯一 DS の存在価値を裏付けるものとして機能していました。

ただ、有り難いことに、1972 年の創業以来、「デモによる販売」すなわち、広告やカタログ等ではなく実際に音楽を再生することによってお客様に製品の良否を判断していただくことを継続してきた LINN の姿勢を再度 DS のプロモーションにおいても徹底することによって、音質の良さを実感し最終的にユーザーとして製品を引き寄せて下さる方々が誕生していきました。

ディスクプレーヤーでは実現できなかった CD フォーマットの高音質再生。DS の市場への初期段階での導入は、図らずも LINN の創業時と同様、地道なデモンストレーションと音質のアピールというオーディオ製品のプロモーションの原点回帰と、エンドユーザーの高音質再生にかける熱意がシンクロできた現場で成果をもたらしました。

比較するものが無い新しい製品ジャンルの製品でしたが、音楽再生を通じて従来のオーディオシステムと融合させ新たな高みに到達することが可能であるという事実を積み重ね、LINN DS の存在を訴え続ける事ができたのです。

翌年春に姉妹機として登場した AKURATE DS も、KLIMAX DS 同様、入力端子には ETHERNET のみが採用され、製品ジャンルとしてのコンセプトを固持するものであり、DS の推進にかける LINN の意欲を再認識させることになりました。



AKURATE DS（アキュレイト・DS）

○ ハイエンドからエントリーレベルまで

新たな製品ジャンルとしてコンセプト発表からほぼ一年後の 2008 年夏、DS のシリーズに新たな製品が 2 機種追加ラインアップされました。

MAJIK DS と SNEAKY MUSIC DS は、先行するハイエンド機種には無かった機能が付加され、結果としてより多くの潜在ニーズが市場にあることを示し、LINN DS が着実に評価を高めてきたことを裏付けることになりました。

MAJIK DS はデジタル出力端子を装備し、既存の D/A コンバータとの接続が可能となり、CD トランスポートを代替する DS の新たな使用法を提案。その際にも、ディスクプレーヤーではできないライブラリ検索やプレイリストの作成等、DS ならではの操作性がもたらすメリットの認知も進行します。

また、SNEAKY MUSIC DS は音量調整とパワーアンプ機能を備え、左右ペアのスピーカーを用意するだけで、サウンドシステムが構成できる DS のオールインワンコンポーネントとして、エントリーレベルのユーザー層拡充が企図された製品として注目を集めますが、当時のネットワーク環境／一般認知などの問題から日本においては時期早々という状況で、海外市場と同様の展開までに至ることはありませんでした。

しかしながら、CD に代わる次世代オーディオのソースとして喧伝された DVD-A が消滅し、メジャーレーベルからの SACD ソフトのリリースも増加しない中、パッケージメディアの擁護者たらんとする保守的なオーディオファイルにも、ディスクメディアがデジタルデータのアナログ手法によるキャリアであることと、データ抽出とファイル管理に関して PC が持つ優位性と、LINN DS のシステムアーキテクチャこそが、音楽再生のプレーヤーとして PC を使用するいわゆる PC オーディオとは一線を画し、高音質音楽再生を目的としてドライブメカの排除、ネットワークの活用を意図した極めて明快なプランに基くものであること等、デジタル音源に関する本質的な理解とデジタルストリームプレーヤーの可能性への興味が、その頃ようやく深まり始めたように思われます。



MAJIK DS (マジック・DS)

○ ソフトが先かハードが先か

CD が登場してから約 30 年間、フォーマットを守り、ディスクプレーヤーも音質向上の様々な手立てを講じて今日に至るのはご承知の通りです。

CD 誕生の 1982 年から活動を始めた LINN RECORDS の存在もデジタルストリーンプレーヤーの開発・製品化に大きく貢献するものです。

アナログ録音と LP レコードのカッティングから始まったその活動が、録音の現場にデジタルレコーダーが持ち込まれ、ハードディスクレコーディングにとって替わるのも時代の趨勢でした。レコーディングセッションのプレイバックやマスタリングの音質をフォーマットの制約無しにそのまま届けたい。演奏家、録音チームの当たり前の感情を可能にする手立てが音楽配信だったのです。

インターネットを通じてダウンロードで音源が入手できる。先鞭を切って世の中に広まってしまった音楽のダウンロードサービスが利便性のために圧縮音源を優先したため、音楽配信にはあまり歓迎されるべきではないイメージが付きまわっていましたが、LINN RECORDS がスタジオマスタークオリティ音源の音楽配信をスターとさせたのは DS 発表の約 1 年前のことでした。

その後、ハイレゾリューション音声ファイルのダウンロードサービスは着実に増加の一途をたどり、メジャーレーベルの再編や衰退が続進するのとは逆に、制作者の意図に沿った録音と楽曲の販売のスタイルとして、特にクオリティミュージックの世界で定着してきました。

録音の現場と後処理のプロセスに携わり、デジタルデータの特質を最大活用する音楽配信と、フォーマットの制約を受けずピュアな音楽再生を可能にするデジタルストリーンプレーヤーとして、LINN DS と LINN RECORDS の活動に当初から備わっていた特質に再度注目する動きが出てきました。

ステレオレコードが世に出てから 15 年後の 1972 年に創業した LINN が CD の登場後 15 年を経て CD12 という伝説的名機を誕生させ、その 10 年後に KLIMAX DS というデジタル音声ファイルに特化したミュージックプレーヤーを発表。アナログ音声の符号化とコンピュータの進化、家庭内インフラの整備を考慮すれば、機は既に熟していたと言えるでしょう。



www.linnrecords.com

○ LINN DS のテイクオフ宣言

2009 年の半ばに DS のファームウェアが一新されました。CARA（カーラ）というファミリーネームのソフトウェア群によって、操作ソフトの視認性や操作性が格段に向上すると同時に、ネットワー

ク上での動作の安定性、さらには音質の向上も伴い、余程の PC アレルギー（トラウマ？）でもない限り、LINN DS が一層ユーザーフレンドリーなオーディオ機器としてご利用いただけるようになり歓迎されました。

さらに同年秋には、DS のプレーヤー機能とデジタル・アナログの外部入力を備えたプリメインアンプを一体化した姉妹機、MAJIK DS-I、SEKRIT DS-I を発表（このタイミングで SNEAKY MUSIC DS は販売完了）。DS のソース機器としての優秀性とコンパクトで機能性の高い LINN エレクトロニクスを合体し既存の製品ジャンルでは括れない機種でありながら、発表以来多くの注目を集めているのは昔日の面影がありません。

LINN は 2009 年 11 月 20 日に、すべてのデジタルディスクプレーヤーの生産を 2009 年末をもって完了する旨の正式発表をし、結果として LINN DS が完全にテイクオフしたことを宣言しました。我国の市場においても、LINN から新たにディスクプレーヤーが登場することが無くなったことを嘆く声はほとんど寄せられず、むしろ、LINN DS が今後のデジタル音楽再生の確固たる存在となることは、既存の DS ユーザー様には満足と安心を与え、予備群たるオーディオファイルには後押しと再注目の契機として捉えられました。

デジタルストリームプレーヤーとしての機能の絞込みと、ハイエンドクオリティからスタートした LINN DS が、ETHERNET 入力しかない、ハードディスクを内蔵していない、ドライブメカを内蔵していない、等々、できないことを指摘されながら冷遇されていたにもかかわらず、そのクリアなビジョンと音楽をより良い音で聴きたいという真摯な情熱に応えることのできる完成度を備えていればこそ、今日の状況を迎えることができたのです。

加えて、ネットワーク経由でソフトウェアをアップグレードすることによって、対応音声ファイルの拡張や、使い勝手の更新、音質の向上を計ることができる製品コンセプトのメリット。LINN DS の 3 年間は、ハードウェアの性能的到達点が高ければ高いほど容易に陳腐化するものではなく、音楽の価値自体が、製品の存在理由を証明し、少しずつしかし着実に賛同者を獲得するという、優れたオーディオ製品がこれまで辿ってきたのと同じことがデジタルオーディオの世界にもあてはまることを物語っているのです。



SEKRIT DS-I (シークリット DS-I)

○ 結びに代えて

2009年、LINN RECORDSの機材の大部分が新調されスタジオマスター音源に自社録音の192k/24bit音源が加わってきました。フォーマットのスペックが音の良し悪しを直接保障するものではないものの、自然なプレゼンスや繊細なニュアンス等、ディスク再生では実現できなかった新しい音世界がサウンドシステムから感得されるでしょう。

操作ソフトもアップデートされ、インターネットラジオもさらに使い易く、音質の優れた局をいくつもプリセットできるようになりました。膨大なレコードやテープコレクションを持っていても、チューナーが偶然キャッチした音楽が心を打つ、そんな往時の体験もネットワークを通して可能になっています。

音楽配信という言葉のもつイメージに振り回されることなくメディアを超えた可能性を開かれた耳に届けることができれば理解を得られる下地はできています。

2010年、LINNにすれば、ようやくとは言え、他メーカーからもデジタルストリームプレーヤーが市場に投入され始めました。また、DRMフリーのハイレゾリューション音声ファイルのダウンロードサービスも目に見えて拡充されてきています。ネットワークプレーヤーのジャンルが充実せずして、これからのコンポーネントオーディオの充実は期待できません。

優秀な音源から如何にして優れた音楽再生を実現するか。オーディオの醍醐味と達成感を味わいつくすためにこそ、音楽配信による高音質音声ファイルと、デジタルストリームプレーヤーを使いこなすことが前提になるでしょう。

デジタルの高音質再生の旅が、今まさに始まったのです。



MAJIK DS-1